# 労働争議によせて

香南中学校　島内　靖

現在の社会は非常に混乱している。新聞に目を通せば「・・・・ストライキ」と日本は年中行事の様に騒いでいる。然しストライキなどと云つてやるのは自分達で国の経済を減ぼし又自分の墓穴を掘る様なものであるという事を忘れてはならない。確かに日本の労働賃金は安い　それは多くの原料を外国から輸入してそれを製品して輸出しているからである。アメリカなどの様に自分の国に沢山の原料があるので輸出もそれだけ多くなり国はますます豊かになる。従つて賃金も高くなる。これこそ全く理想通りの資本主義経済である。貧乏国で原料もろくにない日本が先進国と同じくらいの賃金をもらおうなんてそれは少し虫がよすぎる様に僕は思う。もし日本が世界の水準にまで労働賃金を上げたらどうなるだろう。原料を全て買い、なおかつ賃金を上げたら自然商品の値段は高くなるであろう。そうすれば消費者はもちろん他国の精巧で安い商品を選ぶであろう。そうなればいくら労働者が賃金を高くしても経済の底の浅い日本ではすぐに「インフレ」におちいるだろう。何故現在の我が国の実情を考えて労働者も現在の貧乏国から豊かな国になつて始めてその願いが達成出来るのであるからしてその辺をよく考えて行動すべきではないでしようか。労働者はストライキを行うのが特権の様に思つてやつているがそれが現在のぐらついた政治体制の足をひつぱつている様なものだ。国民の多数が支持し得たこの政治に今少し協力してはどうであろう。日本がストライキをして騒いでいる時でも諸外国は休みなくぐん〳〵進んでいる事をよく考えて一日でも、まじめに一生懸命働き諸外国に優るとも劣らない、りつぱな経済体制を整えて世界の国々と対等に競争が出来る様になりたいものだ。

## 詩

### 発芽

香南中学校　森　憲一

僕達は今発芽なのだ。
健全な二葉を開き
すくすくと伸びる芽
そうだ
それが僕達だ。
虫や台風にやられてはならない
やろう　おもい切りやろう
今のうちだ
何事にも負けず
最大の力を尽して……。

## こども達ののびのびとした思いや、考えを一つ一つの作品を通してみつめるのも、なんらかの参考になろうかと特集してみた。

### つうちやん

香南中学校　小笠原利元

「ハツハツハツ」。目をさますと同時に弟の朗らかな笑い声が聞こえて来た。僕はさつそく起きて障子を開いた。福の神の二代目のような顔をして　「お兄ちやん、しようおそいねえ。」と云つた。六時半に起きたのにおそいと云われて一寸めんくらつたが、つうちやんよりは確かにおそかつたのだ。しかし、当の弟はなにくわぬ顔をして御飯を口につめ込んでいる。僕が顔を洗つて御飯を食べに行くと弟はすでに終つていて、おばあちやんのおひざで甘えている。僕が朝食の終る頃は、もうお父ちやんと相撲をとつている始末。僕もめがねをはずしてお父ちやんにぶつつかつて行つた。ふいを突かれて父は横だおれとなつたので、つうちやんと二人でその腹に乗つたが、その時は愉快だつた。お父ちやんは起きようとして、もがくのだがつうちやんが邪魔で中々起きられない。重荷になつている僕をこそばしてようやく起きた、

その勢いで時間割をしていると、つうちやんがかけて来て、「勝つた、勝つた」と喜んでいる。足が地につかないとはこの事だろうと思つた。僕が「行つて来ます。」と云つたら門に立つて「バイバイ」ともみじのような手を上げてこたえる。朗らかなつうちやんは、今では我が家の人気者である。

### わたしのおかあさん

十市小四年　浜口加保子

わたしのおかあさんは、かぶをたばねたり、ゆうがたになるといちごをちぎりにいつたり、つめたりします。あさはやくから、いちごをいちばへもつていてかえつたら、そうじをして、ごはんのしたくをする。おひるのごはんがすんだらかぶをひく、ほんとうにいそがしそうだ。じぶんも大きくなつたら、おかあさんよりも、もつといつしようけんめいにしようと思う。よるも十時十一時までに、はこにいれてしまう。妹のみえは、ゆうがた四時ごろにねるから、やかましくなくてよいが、五時になるとラジオをかけると口がさめる。おかあさんは六時ちかくなるとすいじにかかる。しごとはすこししかできない。きんじよは四、五人の人がしている。うちは二人だ。わたしは「うちはたつた二人か!」。とくやしくなつてくるがわたしも学校からもどつたら、てつだつてやろうとおもう。

### 私の家

十市小六年　木下泰子

私の家はお父さん、お母さん、兄さん、私しの四人家族です。私とミイは、大の仲よしです。このあいだ子供を四ひきうみましたが、ろくつなネコを生みません。まるもわたしの声えを聞くと、とてもよろこんで、キヤンキヤンとなきます。私は十市小学校の六年生で大きくなつた時の希望は、できれば大学へ、入れてもらいたいが家は、お金がないので、せめて高校までいかしてもらう。高校を卒業すると、スチユウデスになりたい。

兄さんは、高知学園と言う学校だが、勉強をしないので、いつも母にしかられている。兄さんのしよう来の希望は何になるかしらないが、父は、「私のような仕事はさせたくない。」と口ぐせのように、いつている。私しには、そのわけがわかるような気がする。母は、家で、はたらいている。わたしたちのため父や母は死に物ぐるいで仕事をしてくれている　お母さん　お父さんありがとう。父は夜もねないで、はたらいている。むりをしてでもけいこうとうのすたんどをかつてくれたり、勉強のわからないところは、やさしくおしえてくれる。家にいるとき、日曜日は、たいて映画へつれてつてくれる。私のうちはしあわせだ。

### につけん

十市小学校　みそぶちむつひこ

ぼくと、つよしくんと、かじやの山へ、につけんをとりにいきました。につけんの大きなねを、ないふできつても、なかなかきれません。ちよつととつてもうあきらめてかえりました。かえりがけにたけをとつて、かみでつぼうを、つくりもつて、かえりました。かえつてかみをつめて、ならしたらよくなりました。こんどはみかんを、たべたくなつたので、ぼくのうちの山へ、みかんをとりにいきました。つよしくんは四つ、ぼくは、三つとりました。

### おかあさん

十市小四年　前田　豊

四月十日は、おかあさんのたんじよう日です。それでおかあさんになにかおくりものをしようと、おねえちやんとそうだんし、おこずかいをだしあつておかあさんに、げたをかつてやりました。おとうさんのたんじよう日は二月十五日です。

## 短歌集

香南中学校

鎌倉の穂光するどくけずりおり友をあざむきし後の寂しく
一B　夷田美智

稲かりを終りて帰る親子等の喜ぶ顔に目が覚りつく
一C　浜田昌秀

連山の雪よりおろす風割りてしじみ堀るらし子等かけぬける
二A　浜田生子

こけむしし祖父の墓標の細き字を指でたどりて一字づつ読む
二B　井上清志

夕飯のすき焼きなべにつみ草のせりのかほりのほのかなる今日
二C　北村知子

労働につかれし母を見る夕辺書が笑しては涙ぐむなり
三A　能勢富恵

日記帳今日もしるさず夏の午后ぼんやりときく秒針の音
三A　浜田宇田子

朝がたの浅き眠りに亡き父のやさしき顔を夢に見にけり
三B　岡崎俊彦

流れ行く雲を眺めて今日もまた暑き日なりと打水をする
三C　北村尚臣

## 詩

### バラ

香南中学校　安弘貴美子

バラの木は
今
静かに眠つている
黒ずんだ灰色の枝々は
まるで
枯れ木のように
じつと冬を耐えている
しかし
春になると
新しい芽をふき出し
葉を出し
つぼみを出す
そして
色とりどりのかわいい花を
咲かせ
私の心を
ほのぼのとあたたかくして
くれるだろう
バラ
そのバラは
今・静かに眠つている
それでおとうさんのたんじよう日はすぎているので、おとうさんと、おかあさんと、いつしよにたんじよう日をすることにしました。おとうさんには、小さな、おさけのびんをひとつかつてやりました。こんばんおかあさんに見せたら、大へんよろこぶだろうと思います。

## 文芸

### 霧の中で

金田恵美子

〝生きるつて事は素晴らしい事だよ〟
死の床の白いシーツの上で少年はつぶやいた
霧が――深く渦巻き
あせびの花が抱込まれて、あえいでいた
少年の言葉はかすかな余韻を残し
空に分解された
窓の外は深い霧
〝何にも欲しくないよ。唯〟
幾日とはない生命の冴え切つた瞳を少年は向けた
霧に――〟唯何が欲しい?〟
あせびの花はもう見えない。ひいらぎのとがつた葉さえも
少年のわずかな微笑が語る事の一切を担んで居た
窓の外は濃い霧
十七才で昇天した少年は死ぬ前に何が欲しかつたのだろう霧が立ちこめると私はこの問答をくり返す、何年も……。

## 俳句

### 生れけり

東村耕牛

ふるさとの山に笠はれむかえられ
鯉倉の椿は海へ目脚のぶ
星摺の海より星の生れけり
したり落つ泥耕牛の田を上る
耕牛の猛々しきをしづめをり
耕牛の心いつしかしづまりぬ
耕牛のいさゝかつかれたる如し
耕牛のぐつと近づき向かわる
ものゝ芽ののぶときにこそもの思う
苗芝のあそこゝにあるうすみどり
風鈴や隣の仔猫きて遊ぶ
ほたる灯の月になりたるうすさかな
しやぼん玉きらきら光り生れけり

## 黒板ふき

香南中学校　中島　君代

黒板ふきで黒板をふいた
いつぱい書いてある字が
すいこまれるように消えた
むづかしい数学の問題も
国語のかんじもみんな
黒板ふきはきれいに
すいこんでいく

新緑や朝日に光る水の玉　西村　勉
かげろうのもえる浜辺の昼下り　山崎　豪
葉の花の香りをのせた風が吹く　高木　脩雄
電線の少したるみて風ぬるむ　星川　敏
映画見に行く道筋をほたる飛ぶ　岡田　一男
あやめぐさ雨にうたれてうなだれて　中沢たけ美
しとしととあじさい雨にぬれて咲く　溝淵　克子
いちご熟る今年も友の家を訪う　竹村　清美
やわらかく若芽の土を覆る風　杉本　直子
いちご摘む手をとかげ走り去る　松本　春恵
たんぽぽや朝はけぶれる海の色　竹内　好子
教室の窓ごしに見る田植かな　福井　和子
やわらかに若葉のにおう下に立つ　西山　富子
カーテンにかげろうゆらり立ちのぼり
あやめ咲く小路を足のぬれるまま

## かちようらぶくら

香長中学校　三和分室三年

麦の穂の波をうたせるだけの風　白木　幸男
新学期ランドセルにも夢がある　田村　章彦
顔に陽を浴びつゝ読書冬の朝　小田　文雄
稲刈りの朝の光を背に受けて　西山　忠男
井戸端にむつくりと出るつくしかな　山岡　一博
黒土に植える早苗のみどりかな　中田　武
竹の子をひよいと見つけたうれしさよ　栗田　道子
コロコロとかえるの声の空高く　大村　操
夕涼み空一すじの星流れ　松木紀美子
田植田のあちらこちらしまのよう　袁岡　静子
軒下につばめの通う宿がまえ　中田　昌代
小春日や蕗もとろんと生あくび　桜木　美子
春の雨星と女の笠田に続く　松下伸子
れんげ田やあかきじゆうたんしきつめて　八板　絹枝
夕焼くる空はてなくひろがりて